

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

〈日本語訳〉 序論：客家移民研究の現状と課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚, 張, 維安 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009520

〈日本語訳〉

序 論

— 客家移民研究の現状と課題

河合洋尚、張 維安

1 はじめに

本書は、2018年12月15日から16日にかけて国立民族学博物館でおこなわれた国際シンポジウム「客家エスニシティとグローバル現象—華僑華人の拡がりと現在」で発表した内容に基づき編集したものである。本書の関心は中国本土、香港、マカオ、台湾、東南アジア諸国以外の諸エリアにあり、環インド洋、オセアニア、ラテンアメリカの客家を主要な研究対象としている。具体的には、インド、モーリシャス、レユニオン、オーストラリア、タヒチ、ニューカレドニア、ペルー、ジャマイカ、パナマに焦点を当て、加えてカナダもとりあげている。

一般的な見解によると、客家と呼ばれる人々の祖先は中国北部の中原に起源し、唐代末期以降、中原での戦乱を避けるため、中国東南部へと移住した。特に客家は江西省、福建省、広東省の境界地域（以下、交界区と称す；図1参照）に定住し、この地は現在

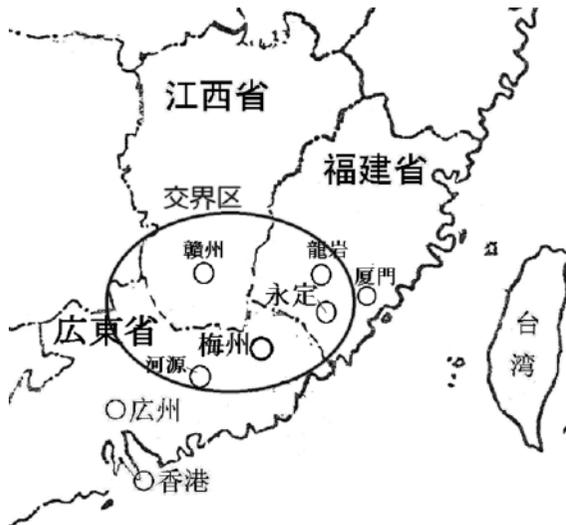


図1 客家の集住地・交界区の位置

に至るまで客家の主要な集住地となっている。だが清朝に入ると、人口の増加や内紛、貧困、災害などにより、一部の客家が交界区から中国南部各地、さらには香港、マカオ、台湾、東南アジア諸国、そして環インド洋、オセアニア、アメリカ大陸などへと移住していった。現在、客家は世界各地で根を下ろしている。客家のなかには現地の言語、習俗を身につけ、客家語を話せなくなった人々もいるし、今や客家と非客家（もしくは非中国人）との混血も珍しくない。だが他方で、客家団体を形成し、たとえ客家語が話せなくても客家としてのアイデンティティを保持している人々もいる。

2 客家華僑をめぐる研究動向

現在、世界の客家人口の半数以上は、中国本土、香港、マカオ、台湾に居住するが、それ以外の地域でも客家は一定数の人口を抱えている。では、各々の国／地域に客家はどれくらいいるのだろうか。実際のところ、通婚、混血、同化の進行や統計基準の不統一などの問題により、世界の客家人口にまつわる「正確」な数値を出すことは難しい。

表1 世界各地における客家の主な分布と人口数

国家	国家人口	華僑華人人口	客家人口	客家比率
インドネシア	1.47億	600万	120万	20%
マレーシア	1342万	453万	100万	22%
タイ	4945万	450万	60万	13%
シンガポール	247万	192万	50万	26%
ベトナム	5620万	200万	5万	2.5%
ミャンマー	3531万	70万	2.7万	4%
ブルネイ	22万	10万	0.8万	8%
インド	7.1億	13.55万	2.2万	16%
日本	1.196億	7.9万	1万	13%
カナダ	2500万	45万	4.5万	10%
アメリカ合衆国	2.33億	150万	10万	6%
キューバ	972万	2.5万	0.8万	32%
ジャマイカ	226万	20万	10万	50%
ペルー	1879万	40万	15万	38%
タヒチ	9万	1万	0.85万	85%
オーストラリア	1522万	16万	1.1万	7%
モーリシャス	100万	3万	2.5万	75%
レユニオン	64万	2.5万	1.3万	52%
南アフリカ	2950万	1.6万	1.5万	94%
イギリス	5567万	15万	3.5万	23%
フランス	5426万	11万	1万	9%

(羅 (1994: 25-29) を参照して河合作成: 「客家比率」とは当該国の華僑華人人口における客家の占める割合を指している)

ここでは客家移民研究の古典書である羅英祥の『漂洋過海の客家人』を引用することで、その分布をおおまかに示すにとどめておくことにしよう（表1）。表1の数値にどれだけの信憑性があるかは疑わしいが、世界における客家の「おおまかな」分布を知ることができる。表1によると、中国本土、香港、台湾を除く世界各地で最も客家人口が最も多いのはインドネシアであり、さらに東南アジア諸国の客家が占める割合は85%以上を占めている。逆に言うと、日本、南アジア、西アジア、アフリカ、オセアニア、アメリカ大陸に住む客家人口の割合は、少なくとも表1だけでみると15%にも満たない。

本書は、南アジア、西アジア、アフリカ、オセアニア、ラテンアメリカの5つのエリアの総称を便宜上、「南側地域」と名付ける。ここでいう「南側」とは文化地理的な概念である。赤道より北にあるいくつかの国々は「南側地域」の範疇にあるし、赤道より南にある全ての国々が「南側地域」に属すわけではない。表1では、西アジアやアフリカ大陸の北部・中部が含まれていないが、我々が現在把握している限りでも、これらの国々には客家団体が存在しておらず、客家人口も極めて少ない。それゆえ、これらの地域は今のところ客家研究の対象外となっている。逆に、表1で示されていないが一定数の客家人口を抱える国／地域もある。セーシェル、ニュージーランド、ニューカレドニア、そしてブラジル、スリナム、ガイアナ、トリニダード＝トバゴ、パナマ、などである。特にスリナム、トリニダード＝トバゴ、パナマは客家系の団体がおり、現地の華人社会において客家のプレゼンスが強い国であると推測できる¹⁾。また、ガイアナの初代大統領アーサー・レイモンド・チャンは客家であるといわれている（柴田 2017）。

注目に値するのは、表1で挙げられている「南側地域」をみると、ジャマイカ、タヒチ、モーリシャス、レユニオン、南アフリカも、現地の華人社会のなかでマジョリティとなっていることである。また、キューバとペルーの客家比率は30%を超えており、全ての東南アジア諸国より高い。つまり、以上の情報を勘案するならば、「南側地域」では客家の人口こそ東南アジアほど多くないが、現地の華人社会では強いプレゼンスを示しているということになる。ところが現在、客家研究の大多数は中国本土、香港、台湾および東南アジア諸国に偏っており、「南側地域」の客家をめぐる研究は相対的に少ない。こうした偏りは博物館展示にも反映されている。世界各地の博物館における客家の展示は、絶対的多数が前者を対象としており、「南側地域」の客家については情報が少ないため展示すら困難な状況に置かれている（河合 2018; 本書の頼・邱・徐論文も参照のこと）。

では、中国本土、香港、台湾および東南アジア諸国を対象とする客家研究は全体の何パーセントを占めるのであろうか。特にここ20年間、中華圏を中心とする客家研究の数は膨大であり、また多様な言語、多様なメディア、多様な形式（学術論文から短文まで）で膨大な研究成果が次々と生み出されているため、その正確な統計をとることは難しい。我々は、中国語、英語、日本語の書籍と論文に限定するならば、この4つの地域を対象とする研究は全体の90%以上を占めるのではないかと推測している。そのうち中国本土

と台湾を対象とする研究は全体の半数を超えるだろう。我々のこの推測に異議を唱える研究者はいるかもしれないが、歴史的に客家研究の主要な対象が中国本土、香港、台湾、東南アジアにあったことは、全ての客家研究者が認めるに違いない。これらの4つの地域が客家研究の重点となった背景には、それなりの歴史的経緯がある。次にごく簡単に客家研究の歴史を振り返ってみることにしよう。

(A) 客家研究がいつから始まったかについては諸説があるが、19世紀半ばから20世紀前半にかけて欧米と日本の研究者が果たしてきた役割を無視することはできない。欧米のキリスト教宣教師は、19世紀半ばに広東省中部の土客機闘（広府系の土着漢族と客家の争い）が生じると、中国東南部の客家について数多くの記録や報告を残すようになった。他方で、日本の研究者は20世紀前半より台湾と中国本土で実地調査をおこない、客家に関する記録と報告を残した。1950年代から80年代にかけては、欧米と日本の研究者が台湾と香港でフィールドワークを展開し、1980年代からは中国本土の客家地域にも足を踏み入れて調査をおこなっている。中国本土と台湾は、今でも欧米および日本の客家研究者による主要な調査地となっている。欧米の研究者は長らく中国本土、香港、台湾の調査研究に集中しており、その他の地域における客家の研究を開始しはじめたのは1960年代に入ってからのことである（河合 2013）。日本の客家研究も21世紀に入るまでほぼ台湾、香港、中国本土の3つの地域に限定されてきたが（河合編 2013）、ここ10年程で多様化が進み、特にインドネシア（横田 2016; 松村 2017）とベトナム（芹澤 2013; 河合・呉 2014; 伊藤 2017）についての研究が増加している。

(B) 1990年代以降、中国本土と台湾で客家に関する論文・著書が急増しており、その大半は中国本土と台湾で出版された中国語の文献となっている。もちろん1980年代以前も中国本土や台湾の研究者はすでに多くの成果を刊行してきたが、1990年代になると両地で複数の客家研究機構が成立し、客家をテーマとする学術専門雑誌がいくつも刊行されるようになった。具体的には、中国本土では1989年に広東省梅州市で嘉応大学客家研究所が成立した後、贛南師範大学、福建社会科学院、四川社会科学院、広東外語外貿大学などで客家研究機構が次々と設置され、他方で台湾でも2002年に交通大学客家文化学院、2003年に中央大学客家学院、2004年に高雄師範大学客家文化研究所、2006年に聯合大学客家言語・コミュニケーション学院と屏東科技大学客家文化産業研究所が成立した。これらの研究機構は、国際客家学術シンポジウムを頻繁に催し、国内外の客家研究プロジェクトを主催し、客家研究者を養成し、客家研究関係のシリーズ本を編集し、『客家研究輯刊』（嘉応大学客家研究所）、『客家学刊』（贛南師範大学客家研究センター）、『全球客家研究』（台湾交通大学客家文化学院）、『客家研究』、『客家公共事務学報』（台湾中央大学客家学院）などの学術雑誌を次々と出版してきた²⁾。1990年代以降は、中国本土と台湾が世界の客家研究の中心地になったといってもいい。ここで我々が強調しておかねばならないのは、20世紀前半から2020年現在に至るまで中国本土と台湾の客家研究の主

要な関心は「自己の国内／地域」にあるということである。したがって、世界の客家研究の大半は、中国本土、台湾、香港を対象としてきたのである（ただし、マカオの客家をめぐる研究は今も極端に少ない）。他方で、中国本土、台湾、香港の研究者が近年、東南アジア客家の調査研究に強い関心を寄せていることは注目に値する。特に香港と台湾では、マレーシア、シンガポール、インドネシア、ミャンマー、ベトナムの客家をめぐる目覚ましい研究成果があがっている（その具体的な文献目録については劉（2015）を参照のこと。鄭 2002; 張編 2013a, 2015a; 蔡 2016; 蕭編 2017も参照）。

(C) 1990年代以降、マレーシアとシンガポールでも「自国／自地域」の客家に関する関心が高まっている（詳細については河合（2013）を参照）。特に21世紀に入ってから、マレーシアとシンガポールの大学は客家団体との提携のもとで客家研究プロジェクトを進めてきた。また、マレーシアやシンガポールの客家研究は、台湾や香港などの研究機関とも連携してきた。前述のように、香港や台湾では東南アジア客家に関する研究が近年増加しているが、そのなかで台湾や香港で教鞭をとるマレーシア出身の華人研究者も重要な役割を果たしている。他方で、現地の客家を紹介する短い文章を除くと、インドネシア、タイ、ミャンマー、ベトナムの客家をめぐる関心が高まったのは、ここ数年のことである。しかも、現時点では台湾や日本による研究成果が目立つ。ただし、最近ではインドネシアやベトナムの研究者が徐々に「自国／自地域」の客家に着目するようになっており（cf. Poerwanto 2005; Tanggok 2017; Chinh 2017）、すでに一定の成果があがっている。ただし管見の限りにおいて、同じ東南アジアといってもカンボジアとラオスの客家に関する研究はまだほとんどみられない。

3 「南側地域」の客家をめぐる研究動向

以上は、150年以上にわたる客家研究のごく簡単なラフ・スケッチであるから、当然のことながら全ての研究蓄積を網羅しているわけではない。ただし、客家研究の大まかな流れを整理することで、これまでの研究が特に中国本土、香港、台湾の客家に集中し



図2 「南側地域」における客家の主要な居住地域（羅 1994; 雨 2006の記載に基づく）

てきたこと、21世紀に入り東南アジア客家への研究熱が高まっていることを改めて知ることができる。ただし、言うまでもなく、全ての客家研究がこれら4つの地域だけに限定されてきたわけではない。本書が「南側地域」と定義したエリアにおいても、先駆的な研究が存在する。

「南側地域」の客家研究は、主に2種類ある。1つは、世界の客家をめぐる分布や客家団体の概説的・網羅的な紹介である³⁾。表1で示した羅英祥（羅 1994）の研究は、その代表例である。また、台湾で刊行された『客家人尋根』でも世界各地の客家に言及した節（雨 2006: 128-135）があり、インド、モーリシャス、レユニオン、南アフリカ、パプア＝ニューギニア、タヒチ、キューバ、トリニダード＝トバゴ、スリナム、ブラジル、アルゼンチン、ペルーの客家および客家団体の概況が簡単にとりあげられている。もう1つは、特定の国／地域を対象とする論文・書籍である。そのなかで相対的に研究成果が多い「南側」の対象地は、タヒチ、インド、オーストラリア、モーリシャスである。「南側地域」の客家研究はまず欧米の人類学者が着手したが、特に21世紀に入ると中国本土、台湾、日本の研究者も着目するようになった。特に台湾は、東南アジアだけでなく、「南側地域」を視野に入れた研究も重視し始めている。台湾の客家研究におけるこうした研究対象の拡大を象徴するのが、2013年に台湾交通大学が刊行し始めた学術雑誌『全球客家研究』であろう。これらの国／地域を対象とする研究がこれまでどのように展開されてきたのか、各々の概略を示すと次の通りである。

(α) タヒチ

タヒチの正式名称はフランス領ポリネシアという。1963年に人類学者リチャード・モエンチがライアテア島の客家をめぐる民族誌を英語で提出してから21世紀に入るまで、フランス本国とタヒチの研究者を中心として、フランス語と英語の書籍・論文が次々と刊行されている。ただし、その大半の研究はタヒチの「華人」を対象としており、必ずしも客家というエスニック・カテゴリーを対象としていない。これらの研究では、タヒチの華人のマジョリティが客家であるため実質的には客家に言及しているが、必ずしも客家に焦点を当てていない。台湾人人類学者・童元昭が1990年代に英語で著した一連の論文も同様である。全体的にみれば、客家をタイトルとする論文や書籍は21世紀に入ってから増加している。エルネスト・シンチャンの客家アイデンティティをめぐる研究は、その代表である。興味深いことに、客家というカテゴリーに着目する論文は、2010年以降に台湾で刊行された書籍や雑誌『全球客家研究』で特にみられるようになっている（⇒詳細は本書収録の姜貞吟論文と童元昭論文を参照のこと）。

(β) インド

「南側」諸国の客家を対象とする研究のなかで、最も文献数が多いのは間違いなくタヒチである。しかし、人類学の研究に限定すると、インド客家の質量はタヒチのそれと比べても勝るとも劣らない。特にアメリカの人類学者エレン・オクスフェルドは、1980年

代から90年代にかけてインドのコルカタ（カルカッタ）でフィールドワークを実施し、民族誌『Blood, Sweat, and Mahjong: Family and Enterprise in an Overseas Chinese』など一連の研究成果を残している。彼女は、インドの3大華人集団（客家、広府人、湖北人）のうち特に客家に焦点を当て、インドの社会構造（カースト制度）やエスニック関係を考察したうえで、コルカタの客家が主に皮なめし業に従事してきたことを描き出した。オクスフェルドはその後、インド客家の新たな移住先であるカナダ（Oxford 1996）、さらには祖先のルーツである広東省梅県（Oxford 2012）でもマルチサイトッド民族誌を著した。オクスフェルドが示した通り、インド客家の多くはカナダをはじめとする海外へ移住したが、その後も台湾の人類学者・潘美玲らがコルカタの客家についての調査研究を継続させている（⇒詳細は本書収録の潘美玲論文を参照のこと）。

(γ) モーリシャス

環インド洋西端のモーリシャスを対象とする客家研究は、1990年代から増加している。ただし、それらの研究は必ずしも客家というカテゴリーに焦点を当てておらず、華人全般について言及するなかで、そのマジョリティである客家がとりあげられている。モーリシャスの華人をめぐる英語と中国語の論文・著作は少なくとも10を超えており（⇒本書収録の夏遠鳴論文を参照）、ここからモーリシャスの客家をめぐる情報を得ることが可能となっている。ただし、我々が把握する限り、モーリシャスの客家を主題とする著書はまだ限られており、論文も夏遠鳴（2012）の「毛里求斯客家史略」など限られている。

(δ) オーストラリア

オーストラリアの華僑華人研究では、国内の客家をめぐる研究がほとんどない⁴⁾。管見の限りにおいて、オーストラリアの客家に関する最もまとまった研究は、羅可群が2008年に上梓した中国語の著作『澳大利亜客家』である。この本は、広西師範大学出版大学における「区域文化叢書」の1つとして刊行されており、同シリーズ本における唯一の「南側」客家の研究書となっている⁵⁾。著者の羅可群は、広東外語外貿大学客家文化研究所の元所長であり、退職後にオーストラリアで客家を対象とする実地調査をおこなった。『澳大利亜客家』では、客家の移住、社会団体をはじめとする全体像が描き出されている。他方で、サラワク大学のダニエル・チョウも近年、オーストラリアの客家研究を進めている。オーストラリアの客家は、広東省からの移民に加え、台湾、香港、東南アジア各地からの移民により、多様に構成されている。そのなかでチョウは、特に東ティモールから移住した客家に焦点を当てた研究成果をおこなっている。最近になって彼は、台湾交通大学の黄静蓉とともにオーストラリアの東ティモール客家移民とそのネットワーク・コミュニティに関する論文を上梓している（周、黄 2014）。

その他の「南側地域」の客家についても、全く研究がないわけではない。ここ10年間、ジャマイカの客家によるライフヒストリーが英語で刊行されているし（Madison 2015; 羅 2016）、ペルーの客家については2014年に『客家研究輯刊』で中国語の短い論文（楊祿

華 2014) が掲載された (⇒詳しくは本書収録の河合報告を参照)。ただし、これら若干の例外を除くと、タヒチ、インド、オーストラリア、モーリシャス以外の「南側地域」をめぐる客家研究は、まだ萌芽的な段階にあると言わざるをえない。例えば、前述の『漂洋過海の客家人』や『客家人尋根』で一定の客家人口を抱えていると言及されているレユニオン、南アフリカ、パプア＝ニューギニア、キューバ、トリニダード＝トバゴ、スリナム、ブラジル、アルゼンチン、もしくは一定数の客家がいると我々が情報を得ているニュージーランド、ニューカレドニア、ガイアナ、ボリビア、パナマについては、客家をテーマとする学術論文すら見つけることが困難な状況にある。また、これまでの客家研究は、基本的に国や地域の区分からおこなわれてきたため、「南側地域」の客家を比較検討したり、国／地域を超えたネットワークを考察したりする視座を失ってきた。

本書は、こうした先行研究の現状をふまえたうえで、「南側」諸国の客家をめぐるデータの提示と考察をおこなうことを目的としている。冒頭で述べたように、本書は、インド、モーリシャス、レユニオン、オーストラリア、タヒチ、ニューカレドニア、ペルー、ジャマイカ、パナマの9つの「南側」諸国、および「南側」諸国からの二次移民が多いカナダを扱っている。本書は日・中両語で編集しており、全ての論文や報告には執筆者による英語要約を、中国語論文については編者による日本語解説を、日本語論文については中国語要約を加えているので⁶⁾、各論文・報告書の仔細はそちらをご覧ください。この序論では本書の構成に関する全体像を示していくことにしよう。

4 本書の構成

まず、インド、モーリシャス、オーストラリア、タヒチの客家については、先述したようにすでに一定の研究蓄積がある。したがって、それぞれ先駆的な研究を進めてきた5名の研究者—潘美玲、夏遠鳴、羅可群、童元昭と姜貞吟—にお願いをし、①ご自身を含むこれまでの研究蓄積をふまえたうえで、②最新の調査データを提示または議論していただいた。5名の論文のなかには先行研究を再分析したものもあるし、もしくは最新のデータをふまえて各自の調査データを再分析したものもある。他方で、レユニオン、ニューカレドニア、ペルー、ジャマイカ、パナマについては客家をめぐる研究蓄積すら乏しい状況にある。したがって、これらの地域で客家に関する調査をおこなったことがある7名の研究者(林文映と李劍諸、張維安、河合洋尚、柴田佳子、張容嘉と張翰璧)に執筆をお願いした。なかでもレユニオン、ニューカレドニア、ペルーの客家については「調査ノート」という枠を設け、初歩的なデータの提示や考察をおこなうことに重点を置いている。これらの論文・報告書はデータそのものが貴重であり、今後、各国／地域の客家研究を進めていくことで先駆的な成果になると自負している。各執筆者は、大半が人類学か社会学を専攻しているが、なかには文学、言語学畑の出身者もいる。した

がって、各論考の内容や方法論には多少の偏差があるが、いずれも移住の歴史、社会組織、アイデンティティをはじめとする各地の基礎データを提示し、「南側地域」の間の比較研究をおこなう基盤を整えるよう努めた。

さらに本書は、国／地域の区分を出発点としつつも、それを越えた客家ネットワークをできる限り示すことも重視した。こうした本書の立場を最も反映するのが、芹澤論文である。この論文は、ベトナム客家の一派であるヌンの華人（河合・呉（2014）が「ガイ人」と呼ぶ集団）に焦点を当てており、彼らの移住に伴ってオーストラリアやアメリカ合衆国で建てられた護国観音廟について議論を深めている。また、柴田論文も中米とカナダの間における客家ネットワークについて言及している。北米は近年、東南アジアや「南側地域」の客家による再移住の地となっている。したがって、「南側地域」の客家について理解を深めるためには、アメリカ合衆国とカナダについても理解を深めねばならない。しかしながら現在、北米を対象とする客家研究も限られている。そこで、カナダ出身の Wong, Kelly, Chong の3氏にお願いし、まずカナダ・バンクーバーの客家に関する紹介と考察をお願いした。他方で、柴田論文では、ページを割いて中米客家のカナダ・トロントへの二次移民が報告がされている。この二つの論文は、今後、カナダ客家の研究を進める土台となりうる⁷⁾。

以上により我々が目指しているのは、「南側地域」の客家をめぐる事例を比較検討し、そこから新たな議論と問題意識を生み出すことである。本書は、そのための契機として、①中国本土や台湾から遠く離れた「南側地域」における客家のハイブリッド性を示すこと、②それにより客家というエスニック・カテゴリーそのものを再考すること、をまず問題提起として投げかけた。この2つの問いは、渡邊欣雄と張維安による基調講演で如実に現れている。渡邊は、自身の調査経験に基づき、従来の客家研究が「客家」や「客家文化」に特色を見出してきたことに警鐘を鳴らしている。渡邊によると、客家研究でこれまで特色とみなされてきた文化的要素のほとんどは、沖縄もしくは中国本土の非客家地域にも見出せるものである。台湾や中国本土ですらそうであるから、ましてや「南側地域」で客家の特色を見出そうとする研究姿勢はより一層の危険性を孕む。張維安が指摘するように、「南側」諸国ではすでに客家語が失われはじめており、言語は客家というカテゴリーを示す指標にはなっていない。それゆえ、例えば英雄が神話が共有されることで、客家というカテゴリーが各々の状況に応じて立ち現れてくる過程をみるのが求められる。

本書は、基調講演（第Ⅰ部）に続いて、環インド洋地域（第Ⅱ部）、環太平洋地域（Ⅲ部）、アメリカ大陸（Ⅳ部）の順で「南側地域」の事例と考察をおこなう。第Ⅱ部～第Ⅳ部の区分は便宜的なものであり、すでに述べたようにエリアを超えた研究も含んでいる。それに対して、第Ⅴ部は、文化展示に焦点を当てている点で、それまでのセクションとは性格が異なっている。繰り返すと、「南側地域」の客家研究が相対的に少ない状況は、

展示にも反映されている。世界中をみわたすと、客家に関する展示をおこなう博物館の大多数が、中国本土、台湾、香港、東南アジアに集中している。これらの地域は、基本的に地元の客家や客家文化について展示するので、展示される対象も中国本土、台湾、香港、東南アジアが主流を占めている（河合 2018: 106-107）。しかしながら、ここ数年間、台湾の客家文化発展センターは台湾以外の客家への関心を次第に高めており、世界各地の客家を調査する研究プロジェクトを推進している。そのなかには、モーリシャス、レユニオン、南アフリカ、ブラジル、ペルー、アルゼンチンなど「南側地域」の基礎資料も含まれている。台湾客家文化発展センターでは、東南アジア客家の展示に着手しはじめ、日本、そして、将来的には「南側地域」の客家にまつわる展示も視野に入れている。頼郁晴・邱秀英・徐國峰の論文は、その最新の動向について報告したものととして貴重である。また、何金樑・洪登欽・徐芳智の論文は日本の客家についての展示構想について報告している⁸⁾。客家の展示における「南北格差」をこのセンターが近年解消し始めていることは大変興味深い。それゆえ本書では、グローバル客家研究の最新の動向を紹介する意味を込めて第IV部の特集を設けた。

5 おわりに

本書の全ての論文が客家エスニシティの問題そのものにとりくんでいるわけではないが、各論文・報告のデータや報告は直接的・間接的に客家という集団カテゴリーを再考するためのきっかけとなりうる。「南側地域」に関するデータと論考を一冊の本としてまとめたことで、どのような新しい発見がみられるようになったかは、読者の判断に委ねることにしたい。しかしながら、我々は、本書の議論を通して少なくとも3つの新たな



図3 広東地図

事実が浮上したのではないかと考えている。

第一に、「南側地域」への客家の移住は19世紀半ばより増加している。その主要な原因は黒人奴隷制度の廃止により、「南側地域」を統治していた当時の植民地宗主国が華人労働者を求めたことによる。19世紀半ばより「南側地域」へ移住した華人労働者の大多数は広東省中部もしくは東部の梅州市となっている。したがって、「南側地域」で古くから住む華人は、広府人が客家の二大勢力になっており、客家は一定のプレゼンスを呈している。また、環インド洋の客家は広東省東部の梅州、オセアニアは香港近くの宝安、東莞、恵陽、ペルーはマカオ近くの中山、鶴山、赤溪、もしくは現在の広州エリア（花都、増城、白雲区を含む）から移住するなど、一定のパターンもみられる⁹⁾。なぜこうしたパターンが生じたのかはまだ明確ではなく、新たな問題意識として浮上してくる。

第二に、「南側地域」ではすでに客家語が失われているため、出身地域を基準として誰が客家であるか否かを認識することがある。「南側地域」の客家のルーツである広東省中部、とりわけ宝安、東莞、恵陽、花県、増城、中山、鶴山、四邑は、広府人と客家が混住する地域である。ところが、タヒチでは、宝安・東莞・恵陽の出身者が客家、番禺・南海・花県・増城・中山・鶴山・四邑の出身者が広府人であると、出身地に応じて無批判に決められるのである。他方で、ペルーでは、中山にある非客家方言地域の出身者が、客家とみなされることもある。すなわち、「南側地域」では、中国本土や台湾とは異なるカテゴリーとしての「客家」が形成されていると想定される。これも今後解明すべき新たな問題意識である¹⁰⁾。

第三に、タヒチとジャマイカの客家は近年、「掛山」という祖先崇拜の実践を客家であることの指標としている。この両地では客家と非客家の混血が進んでおり、客家語を話すことができない客家が少なくないにもかかわらず、客家としてのアイデンティティが依然としてある。張維安が基調講演で述べるように、言語ではない、しかも必ずしも客家だけに特徴的ではない新たな文化的要素が、客家エスニシティの新たな指標になっているのである。また注目に値するのは、地理的に離れており一見して互いに交流もない国々の間で、同じ文化的要素が客家の新たな指標になりはじめていることである。彼らのルーツである広東省などを介した脱地域的な社会的ネットワークがそこに関係しているのではないかと、など新たな問題意識を浮かび上がらせる。

津田や櫻田らは、華僑華人研究が世界中で「中国的要素」を探し出し、華僑華人の多様性と一体性を提示した結果、中国系住民のなかにある非中国的要素を排除し、研究者が認識する華僑華人像をつくりあげてきたことを批判している（津田・櫻田・伏木編2016）。同様に、もし客家研究者が中国本土や台湾の客家研究をもとに「南側地域」で「客家的要素」を探しだすことに奔走したならば、我々が現地の文脈において様々に立ち現れる「客家」カテゴリーを見失ってしまうだろうし、その結果として研究者が認識する客家イメージをつくりあげる結果をもたらすであろう（cf. 河合2019）。だから、我々

が「南側地域」で調査をおこなう時には中国本土や台湾で「常識」とされる客家概念を押しつけてはならないし、現地における言語・文化上のクレオール状態を把握したうえで、誰が「客家」であり、何が「客家文化」とみなされているのか別の角度から探求していかねばならない。つまり、「南側地域」の調査研究をおこなうことで、どのような状況のもとで「客家らしさ」が立ち現れてくるのかという問題への理解を、より一層深めていく必要がある。他方で、中国本土や台湾で普及している客家概念がいかに世界各地に浸透していくのか、客家ネットワークがいかに「南側地域」へと拡大していくのかに着目することも重要である。

我々は本書のタイトルを「客家エスニシティとグローバル現象」と名付けた。それは我々が今後より一層グローバルな規模で客家研究を進めるとともに、それにより客家というエスニック・カテゴリーを見直す作業をおこなっていきたいという願いを込めてのことである。本書の問題意識や個別のケース・スタディが少しでもこうした方向の研究を推進する契機となれば、それに勝る喜びはない。

注

- 1) 羅英祥 (1994: 25-29) によると、1,000~5,000名の客家を抱える国/地域には、カンボジア (2,000人)、ラオス (4,000人)、東ティモール (4,000人)、イギリス・リバプール (1,000人)、オランダ (1,000人)、ブラジル (2,000人)、ガイアナ (5,000人)、スリナム (4,000人)、パナマ (4,000人)、フィジー (4,000人)、パプアニューギニア (1,000人) がある。そのうち「客家比率」が30%を超えているのは、東ティモール (44%)、ガイアナ (50%)、スリナム (31%)、フィジー (57%) である。だが、2012年に河合がフィジーで実施した調査によると、フィジーの老華僑の大半は広府人であり、客家は少数であった。それに対し、その他の情報源 (崇正總會金禧記念特刊編輯委員編 1971: 44) によると、スリナム華人のマジョリティは恵陽、東莞、宝安 (現在の深圳) から移住した客家である。本文中で述べた通り、表1の数字は必ずしも正確ではなく、おおよその概数を示したにすぎない。例えば、南アフリカとイギリスでこれほど多くの客家がいるという信用たる数字を我々はまだ入手していない。他方で、潘美玲教授によると、インドの華人社会で客家が占める割合は16%にとどまらない。
- 2) 1989年に同済大学から雑誌『客家研究』が刊行されたが、すぐに廃刊となった。また、1990年から嘉応大学客家研究所は雑誌『客家研究輯刊』を発刊しはじめた。この雑誌は2020年現在も年に2回断続することなく刊行されており、世界で最も息が長い客家関係の学術誌となっている。この雑誌には世界各国の研究者が投稿しているが、やはり90%以上が中国本土、香港、台湾、東南アジアの客家を研究対象としている。2019年には『世界客家』が月2回のペースで刊行されるようになった。学術雑誌ではないが、世界各地の客家の情報が掲載されており、今後、「南側地域」の客家の概況を知るための有力な資料となる可能性がある。
- 3) 客家団体の記念刊行物 (崇正總會金禧記念特刊編輯委員編 1971ほか)、および客家を主題とする雑誌のなかにも「南側地域」における客家の概況を説明をごく簡単になしたのものもある。ただし、これらはあくまで現地の客家や客家団体に関する紹介にすぎない。

- 4) オーストラリアの華僑華人研究は、中国系住民を「Chinese」の枠に括っており、その下位集団である客家には減多に言及しない。
- 5) 広西師範大学出版の「区域文化叢書」には、2019年現在、『広東客家』、『福建客家』、『江西客家』、『広西客家』、『博白客家』、『賀州客家』、『海南客家』、『湖南客家』、『四川客家』、『香港客家』、『台湾客家』、『シンガポール客家』、『インドネシア客家』、『オーストラリア客家』、『アメリカ客家』（すべて中国語）が含まれている。
- 6) いかに関係共同研究の成果を国際的に発信するかは、現在の客家研究が直面している問題でもある。目下、世界の大半の客家研究は、中国本土、台湾、香港、東南アジア諸国の出身であり、一般的に客家研究者であれば欧米や日本の学者も中国語の読み書きができる。それゆえ、客家研究で目下最も流通している言語は中国語であり、その次が英語である。しかし、「南側地域」の客家研究を今後展開していくことを考えると、これらの地域を研究する人々は必ずしも中国語や英語を解せるわけではなく、多言語での発信が必要となる。翻訳は1つの普遍的な方法であるが、現実問題として翻訳には一定の時間、人材、経費が必要となり、時として効果的ではない。翻訳にこだわると、逆に成果を出す妨げとなることすらある。だから、その時その場の状況に応じて、最も適切だと思われる方法を臨機応変に選択していかねばならない。本書の最大の特長は、2020年現在、世界的に（少なくとも中国語、英語、日本語で）欠けている調査データを提供することであり、速報性が鍵となる。時間が経ち他に関連の論文調査報告が出始めると、本書の価値は一気に減少してしまう。そうであるから、本書は今回、全ての論文を中国語（もしくは日本語）に翻訳せず、翻訳を全ての論文にかかわる序文と総括のみにとどめた。各執筆者には英語の要旨を提供いただくとともに、日本語の原稿には中国語の要約をつけた。さらに、本書では日本語の論文・報告が4本しかないため、日本側の読者を考え、全ての中国語訳に編者が日本語解説（要約を含む）を入れるというスタイルをとった。現代は翻訳機器が流行している時代であるし、まず重要なのはより多くの読者にそれぞれの論文がおおよそどのような内容に言及しているかを伝えることであると、我々は判断した。そうすれば、必要に応じて本書の日本語論文を中国語その他の言語にいずれ翻訳する契機も生まれてくるであろう。本書のこうしたスタイルは、おそらく初めての試みである。このような変則的なスタイルをお認めいただける本誌の寛容な規定に感謝したい。
- 7) なぜ本書は、南アフリカ、パプア＝ニューギニア、ニュージーランド、ハワイ、キューバ、トリニダード＝トバゴ、スリナム、ガイアナ、ボルネオ、ブラジル、アルゼンチンなどの客家について論じていないのか、という疑問を抱く読者もおられるかもしれない。我々も当初、これらの地域の客家を調査したことがある研究者を探したが、本企画に参与いただける適切な方が見当たらなかったという実情がある。それほど「南側地域」の研究は少ないのである。これらの地域の客家研究は今後の課題である。ただし、ここで特に述べておきたいのは、台湾客家文化研究発展センターは、すでにブラジルやアルゼンチンなどのラテンアメリカ諸国で客家研究プロジェクトを実施してきたことである。第5部の頼・邱・徐論文ではこのプロジェクトが紹介されている。その報告書は台湾客家文化研究発展センターにあるので、本書とあわせて参考にしていただきたい。
- 8) 本書では日本の客家を「南側地域」の範疇に入れていないが、日本の客家研究も同様に「空白地帯」であった。ただし、ここ5年ほど、日本の客家研究は徐々に増えるようになっていく。その契機となったのが2011年に台湾客家文化発展センター推進した調査プログラムであり、本書の編者である張維安が代表を務め、本書の数名の執筆者（張翰璧、潘美玲、張容嘉、河合洋尚）も参与した。この調査プロジェクトの成果は、2015年に『東瀛客蹤—日本客家研究初探』

(張編 2015b) としてまとめられている。後に日本の客家研究は徐々に増えており、現在、客家文化発展センターは日本客家の展示を構想している。

- 9) 第二次世界大戦後、東南アジアや台湾の客家が多く「南側地域」へと移住した。東南アジアと台湾の客家のルーツは中国・広東省であるが、彼らはベトナム、マレーシア、台湾の客家としてのアイデンティティを強くもっており、「南側地域」の客家のなかで新たな派閥を形勢している。特に、オーストラリア、ニュージーランド、ブラジルには多くの台湾客家がいると聞く。本書は台湾客家のグローバル・ネットワークについてあまり触れなかったが、「南側地域」における台湾客家とそのネットワークの研究は今後重要になってくる。
- 10) この現象は「南側地域」だけに限られるわけではない。別の論文ですでに言及されているように、広西チワン族自治区に移住した広府人は「客人」と呼ばれており、その後、自他ともに客家であるとみなされることがある(河合 2014)。ベトナムの湖北人も「客人」を名乗り、客家団体に属することがある(河合・呉 2014)。現在、中国本土や台湾では一般的に、中原に起源し、中国の南部へと移住する過程で特殊な言語(客家語)と文化を身に着け、交界区を通して世界各地に移住した集団が、客家であるとみなされている。しかし、たとえ中国本土や東南アジアであっても、「客家」という語句が指す意味は同じではなく、各社会の脈略のなかで様々な立ち現れてくる(飯島・河合・小林 2019: 197-201)。こうした現象は「南側地域」ではさらに顕著であると推測される。

参考文献

⇒ 中国語版を参照のこと